RIRC
宗教情報リサーチセンター

（公財）国際宗教研究所　宗教情報リサーチセンター

「ラーク便り」　論文

→他の論文・研究ノート・小特集のバックナンバーは**こちら**をご覧下さい。

＊印刷してご利用の際は 2 頁目以降を印刷して下さい。

論文

遺伝的及び文化的な継承の相互作用による不可視の病原への対処
―コロナ問題への認知宗教学的アプローチ―

井上順孝

はじめに

生き物としての人間は生命にとって危険なものや敵を察知するときに五感を働かせる。現代の社会環境においては、視覚障害がある人の場合を除くと、環境から得る知覚情報の約8割が視覚によるものと言われる。夜でも照明が周囲にあるのが当たり前になったので、その環境に適応した結果と考えられる。だが日本でも電灯の使用は明治以降である。夜がこれほど明るくなったのは20世紀後半である。つまり生物進化の観点からは、起きているときは絶えず明るい環境の中で生活できるというのは、人類の歴史からするとつい最近のことである。

火を燃やすくらいしか夜の暗さを補う方法がなかった時代には、聴覚、嗅覚をとぎすまして敵を警戒したに違いない。昼間であってもうっそうとした森や起伏の多い場所などでは、視覚が遮られることが多いから、やはり聴覚、嗅覚への依存度が大きくなる。何か変わったものが見つかったとき、それが食べられるか、毒なのかを判断するとき、味覚や触覚も用いられたであろう。人間はたえず周囲の環境から情報を読み取って生きている。

だが、環境の中には五感で捉えられないものが無数にある。そもそも五感の能力には著しい限界がある。もっとも頼りにしている視覚でさえ、捉えている光の波長はきわめて狭い範囲に限られる。個人差があるが、人間の視覚が捉えられるのはおおよそ380nm（ナノメートル）～780nmの波長の範囲とされている。これが可視光線と呼ばれる。光の波長はこれより長いもの、短いものが連続的に存在するから、ほんのわずかの範囲の光しか捉えていないことになる。聴覚にしても同様である。耳が捉えるのは、せいぜい20ヘルツから2万ヘルツの間であるし、高齢になれば上限が1万ヘルツ以下になっていく。

我々の身の回りにはほとんど五感では捉えられない光、音、味覚物質、匂い物質が満ち満ちている。どこに人間の存在に脅威をもたらすものがあるかは知覚できない。病をもたらす細菌やウイルスは五感では捉えられず、その存在は近代科学の発達によって初めて確かめられるようになった。ただ人間は五感で捉えられないものが身の周りにあること自体は、古代から認識していた。その一部は神、悪魔、精霊、妖怪などとして表象され、それらにどのように対処すべきかが、文化的に継承されてきてもいる。

五感で捉えられないが、重篤な病、さらに死をもたらすものがどこか近くにあると認知されたとき、人間には進化の過程で遺伝子に組み込まれた対処法が意識されずとも発現する。それと同時に、育った環境の中で文化的に獲得された対処法が、これまた意識されずとも関与してくる。後者において宗教文化が果たす役割は大きい。仏教が説く生老病死の四苦を持ち出すまでもなく、宗教にとって病や死がもたらす不安と恐怖の克服は常に大きな課題である。遺伝的に組み込まれた対処法と文化的に継承されたものから選びとられた対処法は相互作用し、そのときどきの環境に応じて具体

的な反応を生みだす。2020年に突如起こった新型コロナウイルス感染症問題（以下「コロナ問題」）に際して、どのような宗教的・呪術的対処法[1]が日本で顕著になったかを概観した上で、その認知宗教学的解釈を試みる。

1. 新型コロナという認知

世界的に広がったCovid-19パンデミックは、日本では「新型コロナウイルス感染症」と表現された。またこのウイルスSARS-CoV-2は、「新型コロナ」という略称で呼ばれるようになった。これまで人間に感染したコロナウイルスは6つあり、SARS-CoV-2は7番目である。21世紀にSARSとMERSが世界的に広がり、かつ致死率が高かったので、コロナウイルスは怖いものというイメージが生じた。日本ではSARS-CoV-2に「新型」という形容をしたことで、未知のものという印象を付加することにもなった。なおSARS、MERS以前にみつかっていた4つのコロナウイルスの感染症状は風邪程度とされている。

見えないものがもたらす災厄に対する社会的及び文化的反応は、古代から現代に至るまでさまざまなものが知られている。しかし近代科学が発達したことで、見えないものがまったく表象できない対象ではなくなってきた。このことが現代社会における社会的、文化的反応に影響を及ぼしている。それは宗教的な要素を含んだ反応においても同様である。

1930年代の電子顕微鏡の発明によって、nm単位の小さなウイルスまで可視化できるようになった。細菌の大きさは1㎛（マイクロメートル）前後である。ウイルスとなるとわずか数十nmから数百nmである。おおまかに細菌の大きさの10分の1から100分の1程度である。想像しづらい小ささなのだが、コロナウイルスを説明した図では球体の表面にスパイクと呼ばれる突起が数多く出た形であらわされる。実際には視覚では捉えられないのに、電子顕微鏡で得られた像を示されると、それが恐怖の根源の姿であると、我々の脳内では処理される。

五感で感知されない細菌やウイルスが人間に病をもたらすという事実は、感染した人の症状によって他の人からも認知できるものとなる。重篤な症状、そして死に至る人が出たとき、細菌やウイルスの存在が強い恐怖とともに実感される。ウイルスへの恐怖と感染者への恐怖が不可分のものとなる。感染の可能性が死への恐怖と強く結びつくと、感染の可能性をもたらすモノや行為、さらに感染した人への恐怖が生じて、恐怖が怒りを連動させることがある。今回のコロナ問題では、マスク警察、自粛しない店への誹謗の貼り紙、他県のナンバーを付けた車へのいやがらせなどが各地で起こった。科学的な研究に接することが可能な現代においては、コロナがもたらすような恐怖の発生源は病原体であることは知られている。だが、それは見えないものであるゆえ、しばしば感染した人、さらに店や車までが恐怖の直接的対象に転じたりしている。

こうした対象の置き換えは人間の認知のメカニズムにも依拠する。我々の認知には不可視のものを可視的なものに置き換えて理解する仕組みがそなわっている。誰もが日常的に行なっている例をあげるなら、時間を空間の次元に置き換えてその長さや前後関係を認知することである。我々はどこかで時間を感知している。時間を刻む細胞がある。時間を刻む分子についての研究もなされている。一日とか一か月とか比較的長い時間の認知と瞬間瞬間のごく短い時間の感知は別々になされているとされる。時間が長いとか短いという感覚をもつ。もうすぐとかずっと先とか判断できる。過ぎたこととこれからのことを区別できる。ただそれらはとても主観的に捉えられている。客観的に思えるのは時計という利器が発達し、それを手がかりに時間に関する認知を相互に参照し合えるからである。

認知の直接的手立てがない時間に比べ、長さとか広さとか大きさ、あるいは位置といった空間の次元に関わるものは視覚で認知できる。そこで時間を空間的な次元に置き換えて認知する。時計がない時代は太陽の位置、月の移動や満ち欠け、星の配置などが手がかりであった。時計の針が右回りなのは、日時計が北半球で発達したからである。北半球では南から差し込む太陽の光は地面に右回りに影を落とすからである。また砂時計、水時計というのがある。これは砂や水が細かな隙間を通して上から下へと位置を移動する時間がほぼ一定なのを利用している。いずれも空間において観察されることを時間の変化として認知していることになる。

現代人も時間を空間に置き換えて、自分の行動の助けとし、他者との情報交換の際の手助けとしている。たとえば1週間のスケジュールを手帳に書き込む作業は、時間を空間に置き換えることである。2時間は1時間の倍の長さであるということを示したいとき、時間そのもので伝える有効な手段を我々は持たない。しかし、1時間をある長さの線分に見立てると、2時間をその倍の長さの線分として理解し、相手にも伝えられる。今週の予定と次週の予定が手帳の頁によって区別されるというのも、時間を空間に置き換えるやり方の一つである。

こうした置き換えは生活を送る上で有用であるが、知覚できないものを何か知覚できるものに置き換える作業には、文化的に継承された部分が大きく関与する。何に置き換えるか、どのように置き換えるかは、時代と社会と、そして文化を共有する集団ごとに異なる。技術が発達すると、放射線を音で感知する測定器が発明され、放射線の有無を聴覚に置き換えられるといったことも起こっている。

技術の発達はそうした置き換えに貢献するが、本来知覚できないものへの対処には、呪術的あるいは宗教的と呼ばれるような観念や行動形態も関与してくる。近代科学に基づく認知や対処法がしだいに大きな比重を果たすようになってはいるが、突然の脅威に直面したときの人間の反応は、むしろ近代科学に基づく分析的思考よりもヒューリスティックと呼ばれる直観的な対処法が一気に広まるのが観察される。それを非科学的とみなすのではなく、常に予測不可能な変化をする環境に対する人間の古代からの認知の特性と深く関係しているという観点から検討することが、宗教研究にとって重要である。

2.「科学的根拠」への配慮

コロナ問題は2020年になって突然に、日本社会、そして世界中を大きく揺るがすことになった。コロナ問題でも、見えない恐怖の対象に対する人間の反応は、遺伝子に組み込まれた反応と、文化的に継承されたものに触発された反応の2つが相互作用してあらわれた。日本では近代以降、病の治癒法に関する宗教的ないし呪術的な実践法に対して、科学的立場からの批判がなされることがあったが、それは多くの場合、明らかに非科学的な実践法を主張したときである。社会的にも注目された例としては、明治期に蓮門教が当時流行したコレラにご神水が効くとして信者に配り、批判された事件がある[2]。また戦後においても民間の祈祷師が悪霊を祓うと称して、相手を負傷させたり、死に至らしめたりするような事件があり、これらも批判の対象となる[3]。

こうした場合には、死者や負傷者が出るなどの実害があったり、犯罪性があったりして批判されることが多いが、非科学的な行為という批判は、そうした実害なり犯罪性なりを際立たせる意味も持つ。

しかし伝統的に神社、寺院などで行なわれる儀礼や実践については、非科学性ということはほとんど問題にされない。非科学性が問題にされるのは、蓮門教のような新宗教の場合が多いが、最初に科学的かそうでないかという基準があるわけではない。その宗教の活動が社会的に適切かど

うかの判断がまずあって、それに付随して非科学的な面が議論されるというプロセスを踏んでいると理解できる。今回のコロナ問題に対する宗教側の対応を見るなら、基本的にほとんどの宗教は、そして宗教家は、社会的に是認された科学的な思考法とそれに基づく対処法にはおおむね従っている。

コロナ問題が深刻になり、日本では2020年2月14日に「新型コロナウイルス感染症対策専門家会議」が発足し、3月9日に密集、密閉、密接の「3密」を避けることが提起された[4]。やがて7月にはWHOも3密の英語版として、Avoid the Three Cs（3Cを避ける）をフェイスブックに載せた。3CとはCrowded places, Close-contact settings, Confined and enclosed spacesである。

日本では多くの人が3密を避けるのは科学的根拠があると考え、これを受け入れた。人から人へとうつる感染症であるから、接触の機会を減らすというのは、科学的思考に沿った対処法である。ウイルスによる感染症の概要についてそれなりの正確な知識を持つという人はそれほど多いとは思われないが、感染症の専門家が説明することを受け入れる態度が、文化的に一定程度継承されているという点が肝要である。近代科学は一応信頼するに足りるという信念のあり方が、宗教関係者を含め日本社会にかなりの程度確立されているということを意味する。それゆえ、科学的な根拠に基づいているように見受けられるなら、その対処法を受け入れる人が多かったし、緊急事態宣言にも多くの人が従った。ここには同調圧力と言われるような日本社会に強く作用する力も関係することは確かであるが、本論ではそれがもった影響力には立ち入らないでおく。

3密を避けるためのソーシャルディスタンス、ステイ・ホーム、リモートワークなどが一種の合言葉のようになった。科学的な根拠があると思われる判断に従うという点においては、宗教界も同様の姿勢であった。2020年2月頃から国内の神社、寺院、キリスト教会、新宗教教団、あるいはモスクなどにおいて、集会、恒例行事、あるいは重要な宗教儀礼を次々と中止または延期とする決定がなされた。神社や寺院が関係した地域の祭りなども同様に中止や延期が決定された。

神社では参拝に際しての感染防止策をいくつか始めた。手水舎の柄杓の撤去、あるいは手水舎そのものの使用禁止、賽銭箱の上に置かれた鈴緒を撤去したところも増えた。あるいはお守りや御朱印を手渡しではなく郵送に変えたり、ネットを通して申し込むなどの方法をとるところもあった。神輿渡御を中止した例もある。

3月は仏教にとっては彼岸という重要な法要の時期であったが、中止や縮小する寺院が多くなった。法要を営む場合でも3密を避ける工夫をした。3月17日の『京都新聞』は、京都の各寺院が彼岸法要に向けてどのような対処をしているかを報じている。従来の本堂での儀式ではなく、庭先に祭壇を特設して行なったり、参加者の人数を減らしたり、法要の時間を短くしたりなどである。マスクを用意したり、アルコール消毒を行なったり、食事の提供を取りやめたりというのも多くの寺院でなされたという。

ごく一部であるが、境内を閉門する社寺も出てきた。これは4月7日に出された政府の緊急事態宣言以降に目立った。大阪市の和宗総本山の四天王寺では4月10日からすべてのお堂を閉鎖した[5]。再開されたのは6月8日である。同じく大阪市の住吉大社は4月8日から5月6日まで閉門した。また京都市の浄土宗西山禅林寺派総本山の禅林寺は4月11日から拝観者の受け入れを停止した。拝観再開は6月1日であった。緊急事態宣言の解除が5月25日であるので、これを考慮していると考えられる。キリスト教会でも新宗教でも同様の対処が見られた。創価学会は2月18日から施設の利用を禁止していたが、7月10日から一部を再開した。これらはすべて社会全体のコロナ対策に呼応するもので、宗教施設でも一般社会におけるコロナ対策と同じような姿勢

である。

国外に目を転じても、報道から判断するなら、たいていは日本と同様であったようだ。世界の主だった宗教は、感染拡大を防ぐための手段をすぐにとった。キリスト教やイスラム教が文化的基盤となっている地域でも、科学的な判断に基づいた対処法をとっている。

復活祭はキリスト教にとってクリスマス、ペンテコステと並んで重要な祭である。春分の日の後の最初の満月の後の日曜日という少しややこしい決め方だが、2020年は4月12日であった。ちょうどヨーロッパ中にコロナウイルス感染が広がっていたときである。例年ならば世界中からカトリックの信徒がバチカンに集まるが、ローマ教皇庁は、教皇のミサなど一連の行事に人を入れないことを決め、インターネットやテレビでの映像配信にとどめた。

イスラム教では総じて金曜日の集団礼拝を控えたことが報じられた。イスラム暦では第9月（ラマダーン）に断食が行なわれる。2020年はラマダーンが4月24日から5月23日までであった。やはり世界的にコロナパンデミックが広がっていた時期であったので、イスラム圏では関連する儀礼を縮小した。サウジアラビア政府は、ラマダーン中の礼拝をモスクではなく、自宅で行なうように求めた。一日の断食が終わり皆で食事をとるイフタールはイスラム教徒にとっては、格別の意味を持つが、これも集まって食事するのを避けるようになった。

イスラム教の巡礼は五行の1つであるハッジ（巡礼）とは別に、ウムラと呼ばれる小巡礼がある。これは随時行なわれる。トルコ政府は3月15日にウムラを行なってサウジアラビアから帰国した人たち全員を一時学生寮に隔離するという措置をした[6]。1人が感染したことが確認されたが、隔離されたのは1万人以上にのぼる。ウムラを受け入れてきたサウジアラビア側も、3月中旬に外国人のウムラ受け入れを停止した。

またイスラム暦第12月に行なわれるハッジは7月後半にあたったが、サウジアラビアは規模を大幅に縮小し、外国人の入国を原則認めなかった。

シーア派が国教のイランでも2月中旬に聖地ゴム（コム）で最初の感染者が出たのを機に、この地にある廟やモスクを閉鎖した。またもう一つの聖地マシャドのモスクも閉鎖された。3月上旬にモスクでの金曜礼拝も禁止された。イランの最高指導者ハネメイ師はラマダーンの断食に際して4月に新型コロナ感染者は断食しなくてもいいというファトワを出している。

中にはこうした対処法に抗議し、信仰の重要性を訴えた人もいるようだが、報道を見る限りでは、政府やイスラム教の指導的立場にある人たちは、ほとんどの国において合理的判断を重視したと言える。また5月以降、モスクでの礼拝を再開する国が出てきたが、感染対策は考慮している。たとえばトルコでは5月29日にモスクでの集団礼拝を再開したが、参加者は消毒やマスク着用が義務付けられた。また1.5mの間隔で並んだ。

ヒンドゥー教や上座仏教においても、感染が広がらないように宗教行事を縮小したり、工夫したりした例が報道されている。インドでは3月に春祭りであるホーリー祭を迎えたが、保健省は「大勢の集まりに参加しないように」と警告し、モディ首相もホーリーを祝わないと述べた[7]。上座仏教でも同様の姿勢がとられたようである。たとえばタイではバンコクにフェースシールドを着用して托鉢を行なう僧侶たちがあらわれた。最初は驚かれたが、やがて歓迎されるようになったという[8]。

日本では科学的な対処法を否定したり無視したりするような教団は見られなかったが、世界では一部そうした動きもあった。たとえば、タンザニアのマグフリ大統領は「悪魔のようなコロナウイルスはキリストの体のなかでは生きられない」として、教会やモスクで祈るように呼び掛けた[9]。イスラエルには超正統派と呼ばれるユダヤ教の戒律を厳しく守ろうとする一派がいる。この中には科学的知見

や政府の指示を受け入れない人がいて、4月上旬には人口の1割ほどである超正統派が感染による入院者の半数を占めた[10]。特異な反応としては、インドで3月にコロナウイルスに「牛の尿が効果がある」という主張が相次ぎ、保健当局が否定に追われるという事態が起こった。3月14日にはニューデリーでヒンドゥー教徒のグループが200人規模の集会を開き、実際に牛の尿を飲んで効果をアピールしたという[11]。こうした考えは公の立場にある人の中にも見られるという。『日本経済新聞』は、そこにはメディアの問題も大きいとするデリー大学の教員の意見を紹介している[12]。

3. 宗教文化に継承されたものの利用

コロナ感染が拡大すると、オンライン祈祷、オンラインミサ、オンライン瞑想など、遠隔で宗教的儀礼や実践を行なう例が広がった。誰もいない会衆席に向かって司祭がミサを行なうとか、僧侶がオンラインで法要を行なったり、説法したりするというのは、かつてなかったことなので、新しい事象として当初は人目を惹いた。4月11日付の『キリスト新聞』は、礼拝のライブ配信などの情報についてキリスト教会向けに特化した対策サイトが立ち上げられたことを紹介している。「CHRISTIAN COVID-19」というサイトだが、そこでオンライン礼拝の手引きも掲載している[13]。プロテスタント系の大学である青山学院大学の青山学院宗教センターでは、5月1日から土日を除く毎日、「オンライン礼拝」を配信し始めた[14]。

しかしながら、これらのことはたとえば大学においてZoom等を用いたオンライン授業を実施するようになったことと、並行現象である。新しい情報技術を利用して3密を避けるためになされた工夫である。

他方でコロナ問題に対して宗教がその意義を示そうとする動きも広がった。見えないものがもたらした病や死の恐怖に対して、どのような宗教的対応がなされてきたか。公益財団法人国際宗教研究所の宗教情報リサーチセンターには、とくに21世紀にはいってからの宗教記事についての情報が充実している「宗教記事データベース（以下「記事DB」）」がある[15]。記事DBで2020年1月から6月までの、神社、寺院、その他におけるコロナ退散の祈願等の記事内容や記事数を調べた。このデータベースは網羅的ではないので、実際の記事件数はこれより多いが、この期間の記事数の増減についての傾向をつかむことはできる。

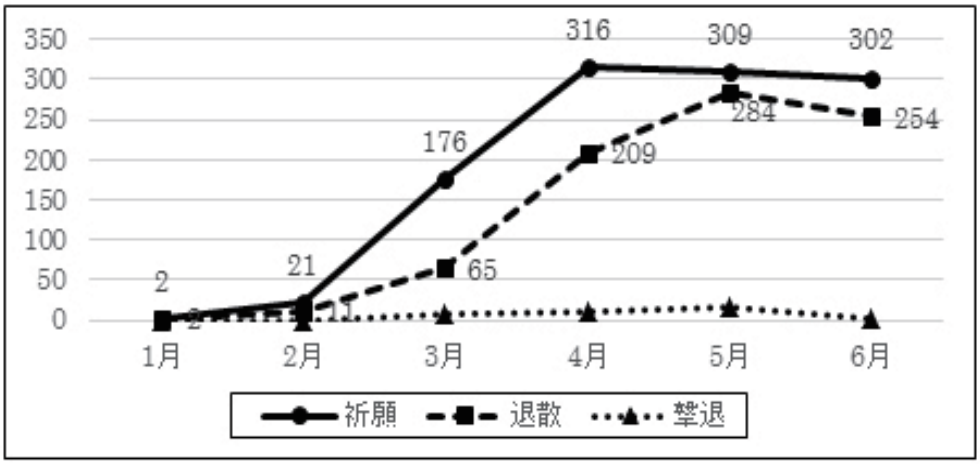
神社や寺院等におけるコロナ退散祈願の類の記事は、4月から5月がピークである。緊急事態宣言は4月7日に出され、5月25日に解除されたが、この期間にもっとも記事が多くなっているのも、社会状況に沿った宗教界の対応であることが分かる。奈良市の春日大社では、2020年1月31日、新型コロナウイルスの広まりが予測された時点でいち早く悪疫退散の特別祈願を始めた。直会殿での祝詞奏上に続いて、神職全員と参加者が中臣祓を唱えた。同社では2003年にSARSが流行したときも、また2009年に新型インフルエンザが流行したときにも特別祈願を実施している[16]。

神社や寺院等で行なわれるこうした祈願は、とくに3月以降数が増えた。コロナ問題に関してなされた儀礼は各種あるが、少しマクロな観点から捉えるために、記事にあらわれるキイワードによって調べてみた。「コロナ」と「祈願」、「退散」、「撃退」とをそれぞれAND検索してみると、表1のようになった。変化が分かりやすいようにグラフ1でも示した。3月から記事が増えはじめ、4月、5月がピークである。撃退という表現が用いられているものはさすがに少ないが、祈願、退散は多い。寺院で行なわれたものと神社で行なわれたものを比較すると、いずれも記事数ではそう大きな違いはない。「コロナ」AND「祈願」の結果のみグラフ2で示した。

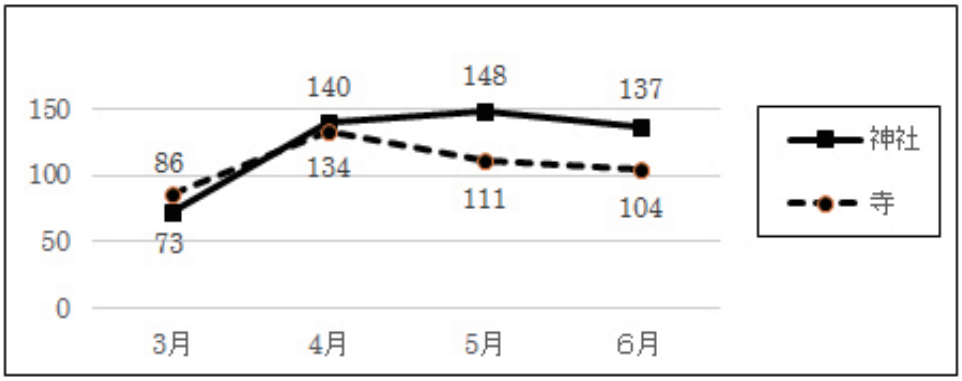
表 1　コロナ祈願・退散・撃退の記事数

	祈願	退散	撃退
1 月	2	2	0
2 月	21	11	0
3 月	176	65	7
4 月	316	209	12
5 月	309	284	15
6 月	302	254	3

グラフ 1　コロナ祈願・退散・撃退の記事数



グラフ 2　コロナ祈願の記事数（神社と寺）



神社や寺院で行なわれたコロナ退散祈願の類について、祈願の類が増え始めた 2 月、3 月の記事からどのような内容であったか少し見ておく。神社における場合は、祝詞奏上やお祓いが中心であり、寺院における場合は経文を唱えたり、護摩を焚いたりするなどの儀礼が中心である。

京都の八坂神社では 3 月上旬に境内に茅の輪が置かれた。本来は祇園祭がある夏に置かれる茅の輪が境内 2 か所に設置され、参拝者はその中をくぐった[17]。東京都大田区の日蓮宗大本山池上本門寺で 2 月 21 日に行なわれた「新型コロナウイルス病魔退散・疫病退散大祈願会」では、大荒行を終えた白衣の僧侶が大殿の前に並び、褌一丁になって経文を唱えつつ冷水を

頭からかぶった。その後、唱題をした[18]。福岡県糸島市の真言宗大覚寺派別格本山大悲王院では、2月から「新型コロナウイルス終息祈願」の護摩祈祷（月1回）と檀信徒・参拝者らによる般若心経写経（毎日）を始めた[19]。

京都市右京区の仁和寺は3月に儀式用「覆面」で特製マスクを作り、さらに梵字を入れて参拝者に配った。「覆面」は法要の際に神聖なものに自分の息がかからないよう出仕者が着けているものである[20]。3月13日には京都市の真言宗大覚寺派大本山大覚寺で「疫病退散祈願法要」が行なわれた。約1200年前の弘仁9年（818年）に嵯峨天皇が平安の祈りを込めて書写した般若心経を奉安する心経殿で般若心経が読誦された[21]。天台宗総本山の比叡山延暦寺では、3月13日に「比叡の大護摩」が営まれた。最澄像の前に設けた直径4メートル以上の護摩壇で、根本中堂の「不滅の法灯」から分灯した火に、千日回峰行を達成した大阿闍梨が護摩木を投じた。祭文では、テロや人種差別の根絶に加えて「新型コロナウイルスの事態終息」との内容が加えられた[22]。3月6日奈良県天川村にある修験根本道場の大峯山寺と、同県吉野町にある金峯山修験本宗総本山金峯山寺が合同で疫病退散大護摩供を行なった[23]。大峯山寺と金峯山寺の合同行事は異例とされる。

グラフ1で分かるように、こうした儀礼は4月以降さらに増え、5月、6月も続いた。見えないものがもたらす病の恐怖に対して、これらの儀礼は日本の宗教文化に継承されてきたもののうち、主要な部分を利用したのである。多くの社寺で行なわれていることは、それに対する一定の社会的な支持や期待が存在すると理解できる。

4. SNS時代のアマビエブーム

コロナ問題に関する宗教関連の事象としては、宗教側が主体的に行なった対処の他に、民間での宗教的・呪術的現象が数多く見られた。民間でなされる儀礼もいくつか報道されている。鹿児島県の薩摩川内市では3月28日、公民館でコロナ終息を願い、県指定無形民俗文化財の「疱瘡踊り」が20年ぶりに舞われた[24]。本来は異なった病気に対するものであったが、無形民俗文化財となっているものがコロナ終息にも援用された。

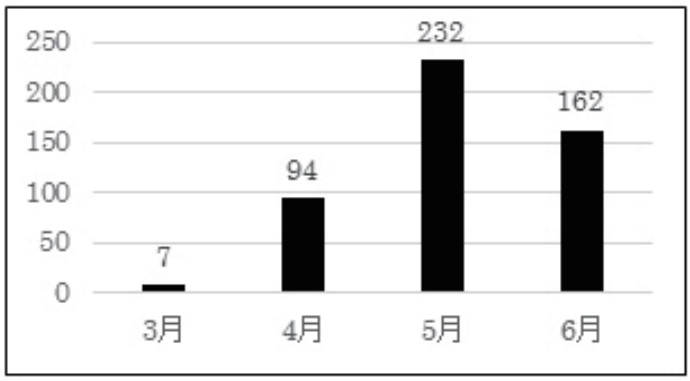
そうした中で予想もされていなかった形で広がったのが、妖怪アマビエ[25]の突然のブームである。コロナ退散の護符的に用いられただけでなく、商業化もなされ、「アマビエブーム」と呼ぶべき現象が起こった。SNS上で3月上旬に急に話題となり、検索数では4月にピークとなった。「アマビエ祭り」と呼ばれる事態となった。「Yahoo!リアルタイム検索」では、3月19日には1日のツイート数が約3万件にものぼった。ヤフーは4月20日、スマートフォン向けきせかえサービス「Yahoo!きせかえ」において、アマビエのきせかえテーマを提供開始したことを発表した。アマビエが人気になったのち、他の妖怪、たとえば件（「くだん」とも）、クタベ、ヨゲンノトリ、神社姫なども護符的に用いられたりしたが、いずれも一部の地域に限られた。

記事DBで調べると、東京スポーツの3月10日の記事がアマビエに関する最初のものであった。SNSをきっかけに広がったことが書かれている。アマビエは当初から遊び的要素の強いものとして登場したが、コロナ退散のための呪術的行為という要素が多少の差はあれ混在していた。アマビエの絵、人形、さらにアマビエをかたどったお菓子などの類が次々と出現した。これをアマビエの商品化と呼ぶとすると、商品化はお菓子、酒類、人形、アマビエだるま、こけし、ストラップ、ブレスレット、彫刻、ダルマ、煎餅、クッキー、包装紙、パン、酒、車のステッカーと、きわめて多様な展開をした。

記事DBではアマビエ関連の記事数は、SNSとは少しずれて5月にピークとなっている。内容は

上記のようにきわめて多様で、一つの新しいアイデアが出ると、すぐそれが各地に広がっている。情報時代におけるアイデアの広まりの特徴であろう。ただアマビエに関しては遊び的要素とか商業化の要素が目立つものばかりではない。ある思いを込めたものというのもある。とくに彫刻の場合は、製作に一定の時間がかかるので、コロナ終息の願いというのはいくらか大きな比重を占めると考えられる。一つ例を挙げる。

グラフ３　アマビエの記事数



「感染収束を願いアマビエ像設置」という見出しの記事は、チェーンソーで丸太を彫刻するグループが京都大学所蔵の江戸時代の絵図をもとにデザインして2019年9月の台風で倒れた杉の丸太を削って3日がかりでアマビエ像を作ったことを紹介している。グループの代表は「丸太自体にも、場所にも力が宿っている。これで新型コロナウイルスを収束させてほしい」と語っている[26]。

神社や寺院におけるコロナ退散祈願に際して、アマビエブームが採り入れられた例もある。御朱印や絵馬、お守りにアマビエの絵が描かれたりした。それほど多くはなかったが、記事DBで調べると、アマビエと護符についての記事は4月～6月で25件、アマビエと御朱印は同じく33件、アマビエとお札は27件ある。少数だが、アマビエ絵馬を作成した神社もある。またアマビエの彫刻をお守りのように用いた例もある。二、三の例を示しておく。

岐阜県高山市の桜山八幡宮では「妖怪アマビエ」の護符を作成した。アマビエを描いた瓦版の写しに、神社の祭神の大物主神と少彦名神の朱印を押したものである[27]。富山県南砺（なんと）市の金城寺では井波彫刻師が彫ったアマビエを本堂に置いたことを『北日本新聞』が報じている[28]。石川県金沢市の金澤神社では6月1日からアマビエの彫られたゴム印を絵馬に押したものを作成した[29]。

疫病退散といえば、より古くから日本全国で知られているのは茅の輪である。茅の輪は奈良時代に編纂された備後国風土記（逸文）に出てくる蘇民将来の話に由来する。疫病から身を守るために小さい茅の輪を腰に付ける風習が生まれた。今でもそのように用いている地方がある。現在神社の6月晦日の大祓（水無月祓、夏越の祓）に用いられる茅の輪は、境内に置かれていて参拝者がくぐれるほどの大きさのものである。この大きな茅の輪にコロナ退散の意義を込める神社はあったが、小さな茅の輪をコロナ退散の護符に用いることはさほど広がらなかった。

日本の宗教団体や宗教家たちは、社会が受け入れた科学的な常識に基づいて信者に対応し、活動を控えたり恒例の行事の内容を変更したりした。信者たちの振る舞いが感染を一挙に拡大させた韓国の新天地イエス教会でのような形での問題は起こっていない[30]。コロナ封じに牛の尿を飲むヒンドゥー教徒のような振る舞いも報告されていない。宗教的戒律をなによりも優先させるユダヤ教の超正統派のような例もない。アマビエの使用も、非科学的な面が目立つような形にはなっ

ていない。

科学的対処法を否定はしないままで、コロナ封じの祈祷の類を行ない、見えないものがもたらす不安と恐怖を減じようとする。その際、歴史的に積み重ねられている日本の宗教文化の中から仏教宗派、神社、あるいは宗教家でない人たちも、それぞれにある継承物を選択して、祈願等の宗教儀礼を行なっている。

ではなぜこうした儀礼によって、不安や恐怖が和らぐのか、あるいは和らぐと信じられているのか。人間のどのような認知のあり方、そして情動の働きがこれに関わっているのか。神社や寺院などの宗教団体によってなされているコロナ退散等の祈祷に対して、非科学的とか不要なものという社会的な批判は見られない。また御朱印やお守りにアマビエの絵を描くという例に対しても、個人的な感想はさまざまであるにしても社会的な強い批判は起こっていない。社会的批判が顕在化していないということは、このような行為が日本の宗教文化の要素を利用する仕方についての暗黙の社会的了解があると解釈できる。ただし、注意すべきは、これはあくまで現代日本における社会的了解である。日本社会はいつも同じような了解の基準を有していたと考えるべきではない。日本社会も歴史をたどれば、病気治癒の宗教的対応に関する許容のされ方は同一ではない。社会層ごと、年齢層ごとといった違いもある。日本の宗教文化には主要な要素となるものがいくつかあるという捉え方と、日本の宗教文化は本質的に一貫しているとか、基盤となる確固としたものがあるという捉え方には大きな違いがある[31]。

角度を変えて言うと、文化継承がどのようになされるかの具体的場面を見ていくとき、そのときどきの社会状況は、ある行為を選択していく上での環境として作用するということである。神社や寺院等での祈祷や、アマビエを護符的に使うといった対処法が社会の中で広く行なわれ、非科学的であるといった批判が起こらないというのは、現代日本社会がもっている許容範囲を示している。たとえば、牛の尿を飲むという話には驚くが[32]、アマビエの絵を御朱印に描くというのは好意的に受け止められるのはなぜかというふうに考えると、社会の許容範囲を環境として捉える意味が分かりやすくなるだろう。

5. 遺伝的な反応と文化的に獲得されたものによる対処

人間を死に至らしめるかもしれない危険な病をもたらすものが知覚できない場合でも、その恐怖への対処法のいくつかは遺伝子に組み込まれている。それは文化的に獲得されたものとの相互関係によって、その時代の環境に影響を受けながら具体的な反応として生まれる。人間の認知システムや情動は、遺伝子に組み込まれた仕組みと、文化的に獲得されてきた仕組みの双方の影響を受けて作動するとする考えは、ミーム論、二重継承（相続）理論（DIT）、二重過程理論といった20世紀末から議論が盛んになった説に共通して見られる[33]。これらはいずれも基本的にダーウィン進化論を基盤に置いたものである。この観点からの議論は、認知哲学、進化生物学、進化心理学、脳神経科学など広い分野で展開されている。欧米の認知宗教学にもその影響が見られる。

ここで示してきたようなコロナ問題によって生じた不安や恐怖への宗教的・呪術的な対処法について、こうした理論が前提としていることを参照すると、どのような視点が開けるだろうか。コロナ問題に関して宗教的・呪術的な対処法が日本各地で見られたということは、いかに科学が発達しても基本的な不安や恐怖に対する人間の対応は古代からさほど違いがないことを確認させる。さらに言えば、科学的根拠があるとされた対処法も、実際には呪術的に適用されている場合が少なくない。マスク着用や3密を避けるということは、科学的な根拠がある。だが、どのようなマスクが効果があ

るのか、どのように着用しなければならないかを考慮せず、粗い布製であろうとマスクを着用しているだけで効果があると思いこむとすれば、多分に呪術的な対応である。マスクという形状がコロナ対策の標識とされ、それが安心の源になっている。この観点からすると、4月1日に唐突に表明されたいわゆるアベノマスクの配布は、呪術的対処法がそれなりの有効性をもつだろうという前提を含んだ政策であったとみなせる。

科学的な判断をすることと、科学的であることを重視する社会の趨勢に従うように判断することとは異なる。後者には呪術的思考や行為が入り込む余地が大いにある。同調圧力のような科学的思考とはかけ離れた社会的力も作動する。この点は以下の議論においても念頭に置く必要がある。

人間に遺伝的に組みこまれた環境への反応の仕組みは非常に強力である。その仕組みは長い進化の過程における淘汰を経ており、反応は瞬時であり無意識的でもある。生物の生命は常に危険にさらされている。生命の危険と感じられたようなものに遭遇したときの反応は決まっている。闘うか逃げるかという「闘争・逃走反応（fight-or-flight response）」というほぼ二択である。これに身動きしないという反応を加えることもあるが、せいぜい2つか3つの少ない選択肢から瞬時に選ばれる。この反応は当然人間にも見られ、進化的に長い時間をかけて獲得されたので、安定度が高く変わりにくいと考えられる。

他方でミーム、あるいは文化的遺伝子などと呼ばれている文化的に獲得され継承されるもの（以下、「ミーム」としてまとめる）からの作用は、より複雑な選択のプロセスを踏む。ただ何が文化的に継承されやすいものになるかに関しても、進化論的なプロセスは作用すると考えられる。それぞれの環境に適応したミームが生き残りやすいとみなされている。環境の多様さに合わせて多様なミームが生まれるが、それらは存続のために協力したり競合したりする。人間は遺伝子の働きをほとんど意識していないが、ミームの働きも意識していないことが多い。小さな蛇を見ても怖がる理由は自覚されていないし、幽霊が出たとか聞いて怯える理由も自覚されていない。

ミームが関わる反応は遺伝子に組み込まれた反応に比べるとはるかに多様である。怖いものに怖いもので対抗するという場合もあれば、懐柔したり、からかったり、共存を図ったり、無視したり、さまざまなものが文化ごとに創り出されている。科学的対処も文化的に獲得されたものであるから、多様な対処法が提起される。ウイルス撲滅を目指したり、集団免疫獲得を目指したり、免疫力を高めることに主眼を置いたりといった違いは、科学が文化的産物であるがゆえの多様性である。ホモサピエンスとしての進化にかかった時間に比べれば、人間が多様な文化を形成するのにかかった時間はきわめて短いが、文化的継承物は実に多様である。また何が主流になるかは時代ごと、社会ごと、さらに地域ごと、グループごとなどによって異なってくる。日本に長く伝わっている文化であっても、互いが競合したり、あるものが他のものを駆逐したりすることも起こる。

ではコロナ問題への宗教的・呪術的対応には、どのような特徴が見出されるであろうか。闘争・逃走反応はどのような場面でも作動すると考えられるので、あらゆる宗教的・呪術的儀礼や実践は、たいていが闘うか逃げるかのどちらかの反応を基盤にしている。身動きしないという反応に関する考察はここでは割愛するが、強いて言えば、すべての宗教活動を中止したという場合は、これに含めてもいい。コロナ退散祈願の類は闘う反応をベースにしたものである。それが祝詞や経文のような文言が中心であっても、祓いや護摩祈祷のような一定の儀礼的な動作が中心であっても、基本的に闘う姿勢なのである。御朱印にアマビエの絵を描いたりするのも同様である。他方、3密を避けて行事の規模を縮小したり、覆面やマスクをして儀礼に臨んだりするのは逃走の反応をベースにしている。狛犬にマスクをかけさせる神社もいくつか出たが、これも突き詰めれば逃走の反応がベー

スである。

退散祈願をする行為が自然な宗教的行為として受け止められるのは、その行為が日本の宗教文化の中に長く継承されてきたからだが、同時に遺伝子に組み込まれた反応と矛盾しないことが重要である。狛犬だけでなく地蔵にマスクを付けさせる例も見られた。人間でなくこうしたものにマスクを付けるという行為は新しく見えるが、地蔵に前掛けをかけるなどといった民俗はあるから、連想させるような先行物はあったとは言える。いずれにせよ遺伝的な反応と矛盾していない。覆面をしながら祈祷するというのは文化の複雑さを示すもので、一方では闘争に根差し、他方では逃走に根差しながら、一連の儀礼として完結している。逃げながらも闘うという構図である。宗教的な儀礼が相反する心理的葛藤の上に成り立っているのは珍しいことではない。

マスクを着用しない人を批判したりときに恫喝したりする、いわゆる「マスク警察」と呼ばれる人たちについての報道が各所でなされ、同調圧力の悪しき例のように解釈されたりした。これはマスクをしていない人たちが、自分の逃げる反応に対する妨げとして感じられたとも理解できる。あまり人通りが無い所でマスクをしないのは、科学的な思考法に基づく判断からすれば問題がない行為である。しかし、これに対し苛立ちの情動が起こる人は、他者のマスクをしないという行動を、自分が選んだ遺伝子に組み込まれた反応と対立するものとして認知したからだと解釈できる。遺伝子に起因する反応はいつでも非常に強力である。

6. 文化のエピジェネティックな伝達

報道された記事から判断する限りでは、コロナ問題に対するそれぞれの宗教の対処法や呪術的行為には多くの共通性がみられる一方で、細かく見ればバリエーションに富む。比較的類似する文化的継承物が用いられているが、中にはきわめて新しい現象も見られる。そこに宗教文化の継承のされ方について考察し、また情報時代という新しい社会環境の影響がどう及んでいるかを検討する手がかりがある。

本論では主に神社、寺院の事例について見てきたが、キリスト教会や新宗教教団、さらにモスクでも、コロナ問題への対処はそれぞれになされている。神社や寺院と大きく異なる傾向は見出されない。神社や寺院の事例を中心に見たのは、コロナ問題のような危機的な状況に対するとき、日本の宗教文化に長く継承されてきたものがどう作動するかが分かりやすいと考えたからである。

コロナ退散の儀礼においては、近代以前に確立された儀礼の踏襲が主流をなしている。神社神道においてみられる疫病への対処法の主流は、言葉としての祝詞であり、行為としての祓いである。仏教宗派では言葉としての経文であり、行為としての祈祷である。特定の言葉と特定の行為によって病因を退散させようとするのは、人だけでなく多くの生物に対し言葉を発し、ある行為をすることが対象になんらかの影響を与えるという認知が、文化的に獲得され継承されているからである。これがウイルスという直接には知覚できないもの、科学の発展によってようやく間接的に知覚できるようになった対象にも適用されている。対象の反応が直接確認されるわけでもないのに、なぜこれらが不安や恐怖の解消手段として現代社会で一定の信頼性をもつのか。社会的に定着している宗教文化の継承物の利用は当然に思われるが、社会的に長く継承されてきたものへの信頼というのは、ヒューリスティックな対処法の1つである。これは科学的かどうか、実際に効果があるかどうかをアルゴリズム的に分析するやり方とは異なる。長く社会に継承されてきたものの選択が不安解消につながるということを、意識されずとも人間の脳は判断しているということである。

一方でアマビエの例にみられるように、それまでほとんど知られていなかったものが急に脚光を浴

びるという現象が見られた。この現象には情報時代というものがもたらす影響があらわれている。コロナ問題に関して日本で見られた宗教的・呪術的対処法を概観すると、情報技術を取り入れた様々な工夫と、古くから伝承されている宗教的ないし呪術的観念をときに新しい装いを加えながら受け入れているという特徴が見えてくる。この点を考察する上で参考にしたいのが、文化的エピジェネティクスという考えである。

エピジェネティクスとは、もともと生物学の用語であり、DNAの配列変化によらない遺伝子発現を制御・伝達するシステムとその学術分野のことである。この仕組みを文化現象にも適用する試みが2010年代に増えている。DNAは同じでも環境との相互作用によって実際の生物の表現型は多様に変化する。これを宗教現象に適用するとどのような発想が生まれてくるか。参考となる論を一つ紹介する。

進化研究所（The Evolution Institute）は2010年に米国のフロリダ州サンアントニオに設立されたシンクタンクである。進化生物学者のデイビッド・スローン・ウィルソン（David Sloan Wilson）[34]が設立者である。進化研究所のサイトに、宗教的エピジェネティクス（Religious epigenetics）というタイトルの文章が掲載されている。次のような書き出しである[35]。

「保守的なキリスト教派と進歩的なキリスト教派は同じ聖典を共有しているのに、どうしてこれほど異なっているのか。それは同じDNAを共有しながら、皮膚と肝臓の細胞がこれほど異なっているのと同じ理由からです。」

聖書の文言は同じであるのに、歴史上出現し今日もさらに多様化しているキリスト教の教派は、聖書の文言のうち受容する個所が異なったり、同じ個所を異なって解釈したりする。それが教派ごとの大きな違いにつながるとし、これをDNAのエピジェネティクスに喩えている。少し一般化して述べると、文字化された教典の類や、一定の形式として確立された儀礼も、そのときどきの社会やグループによって、何が強調されるか、どの部分が用いられる、どのような解釈が加えられるかなどは、創発的に変わるということである。

この議論は1つの宗教が歴史的に多様に展開し、ときにまったく相反するような主張がなされるような場合についてのかなり説得的な説明である。そのような例は宗教史にも、また現代宗教にもいくらでも見出すことができるが、分かりやすい例を1つ挙げてみる。次の2つはいずれも新約聖書にある文言である。

「わたしよりも父または母を愛する者は、わたしにふさわしくない。わたしよりもむすこや娘を愛する者は、わたしにふさわしくない。」（マタイによる福音書　10：37）

「子供たちよ。すべてのことについて、両親に従いなさい。それは、主に喜ばれることだからです。」（コロサイ人への手紙　3：20）

このどちらを新約聖書に書かれた父母に対する正しい教えとするかで、その教派や牧師の主張は違ってくる。教祖の教えを否定する親はサタンであると説く新興のキリスト教教団があるが、マタイによる福音書にその根拠があるという主張が可能である。他方、親に従うことを重視したい神父や牧師はコロサイ人への手紙の当該箇所に依拠すればいい。

こうした例はどの宗教にも見出せる。とくに中心となる教典が明確な宗教においては、エピジェネティックな多様な解釈は歴史的に繰り返し生じたし、今後も同様であろう。コロナ問題に即して言うと、神道においては、疫病を退散させるための祝詞と祓の儀式が平安時代より続いてきた。律令体制のもとでは国家的な祭祀に組み込まれていた。仏教宗派にはそれぞれに祈祷の伝統がある。とくに密教では病気治癒のための祈祷は重視されてきた。このように文言として、あるいは具体的な儀礼の

方式として継承されているものは、DNAの機能に喩えることができる。

他方で、現代のような社会環境における宗教的対応、コロナのような性格の病因に対する対応には、それに応じた変化が生じる。細かく言えば、神社や寺院で以前からなされていた御朱印にアマビエなどの妖怪を描くといったものもこの変化の一つである。こうした変化は遺伝子のエピジェネティックな発現、すなわちDNAがメチル化[36]やヒストン修飾[37]によって異なる発現をしていくような現象に比せられる。

宗教文化を含め文化の伝達は多様な形をとる。親から子への「縦型」、仲間同士の「横型」、年長者から年少者への「斜め型」、より地位の高いものから低いものへの「威信型」、その他、人気ある人からの伝達、ランダムな伝達などが提起されている[38]。これらは人間関係に重きを置いた区分だが、現代における伝達を考える場合には、情報技術の急速な進歩を考慮しなくてはならない。上記のランダムな伝達に含めうるだろうが、情報伝達のタイプでいうと、長い歴史をもつ対面型に対し、近代に急速に発達したマスメディアを介した情報伝達、20世紀末のインターネットの大衆化の進行に伴うSNSを介した情報の伝達の影響には特別の注意を払う必要がある。神社や寺院等での儀礼の伝達は従来の文化伝達に大半を依拠しているが、アマビエの突然のブームなどはSNSの存在抜きに考えられない展開を示しており、現代の情報伝達の経路が大きく関わっている。エピジェネティックなあらわれに今までなかったような形をとる。きわめて短期間に広範囲にランダムな経路で影響が生じうる。

7. ストーリーの重要性とプロジェクション科学

文化のエピジェネティクスという考え方では、文化的に継承されてきたもののうちのあるものが、そのときの環境に応じて選びとられ、異なった発現をすることになる。とはいえ、どのような変異も広くその社会に受け入れられるわけではない。エピジェネティックに発現したものが現代日本社会に一定程度受け入れられるとき、どのような人間の認知の特徴が関わりをもってくるのか。恐怖や不安への対処法が宗教的・呪術的になされるとき、重要な意味をもつのは、そこで示されているストーリーである。ミーム論や二重過程理論でなされている議論を敷衍すると、そのストーリーが遺伝的に継承されているものと相反さないことが肝要になる。

ストーリーが重要であるということは、本論で示した例のうち、非科学的な対処法の中に分かりやすいものがある。タンザニアのマグフリ大統領が述べたとされる「悪魔のようなコロナウイルスはキリストの体のなかでは生きられない」というメッセージは、イエスあるいはキリスト教会は、コロナに負けない力を持っているというストーリーの提示である。闘争という遺伝的な反応に根差しつつ、かつそれに沿った文化的継承物 ― この場合はイエス・キリストという言葉に込められた力 ― が選びとられている。

アマビエも江戸時代末期の瓦版に書かれたとされる伝説を伴っている。半人半魚の奇妙な姿が危機的な状況を守ってくるという非日常的だが明快なストーリーである。これは茅の輪の伝承にある、危機のときに用いれば護ってくれるというやはり非日常的で明快なストーリーと重なっている。だが茅の輪伝承にある怖い部分は欠けている。蘇民将来の説話では、旅の宿を乞うた武塔（むとう）神に対する兄弟の対照的な扱いがまず述べられている。裕福な弟の巨旦将来によるすげないあしらいと、貧しい兄の蘇民将来のやさしいもてなしである。後に村を再び訪れた武塔神は、巨旦の一族は滅ぼした。蘇民の子孫には自分がスサノオであることを名乗り、茅の輪を付けていれば疫病を逃れられると教えた。すさまじい復讐が一方にある。

しかし今日神社の境内で6月晦日に行なわれる大祓に用いられる大きな茅の輪に、復讐がなさ

れる伝承部分はあまり用いられていない。茅の輪が災いを祓う力をもつという肝心な目的が保持されたストーリーだけで十分な機能を果たしている。アマビエの出現に際して江戸末期の瓦版に記された由来が紹介される場合もあるが、アマビエは疫病を追い払う力があるというストーリーだけでほぼその意義は十分である。病がもたらす不安や恐怖にリアルに対処していく場合、込み入ったストーリーはさほど必要ではないと考えられる。

宗教的・呪術的対処法における明快な手段を示したストーリーがもつ重要性を考えるとき、それがどのような認知に基づいているのかも問題になる。この点について援用したいのは、プロジェクション科学で議論されている視点である。

見えないものを駆逐しようとする宗教的、呪術的な試みは、医学的な試みとは異なる面が出てくる。医学では病原となる細菌やウイルス類を観察できるように電子顕微鏡などの技術を向上させ、病原の性質を明らかにして、どのように感染するかの具体的メカニズムを探り、具体的対策をその都度考えていく。複雑なアルゴリズム的思考法が常に求められる。

宗教的・呪術的に不安を和らげる対処法においては、これとは異なった形での対象の認知が生じる。知覚できないものを知覚できるものに置き換えたり、知覚できない不安の対象を知覚できるものを用いて駆除しようとしたりする。そうした置き換えは具体的対象においては文化ごとに異なるが、置き換えによって生じる認知上の効果、心理的効果は、共通していると考えられる。

プロジェクション科学は2010年代に展開したものだが、鈴木宏昭らの提唱者は第三世代の認知科学と位置づけている。人間の対象の認知に関して、投射（projection）、異投射（misprojection）、虚投射（fictional projection）という3つの区分を設けている[39]。これは投射元（ソース）と投射先（ターゲット）の関係に基づいて設けられた区分である。ソースが実在の対象で、ターゲットもソースと同じ対象である場合が投射である。ソースは実在の対象であるが、ターゲットがソースと異なる対象である場合が異投射である。そしてソースは実在せず、ターゲットが想像上の対象である場合が虚投射である。

投射は日常的に行なわれていて、相互の了解も容易である。病気に対する医学的対処はむろん投射によってなされる。しかしながら、投射の仕組みは実は非常に複雑で、脳神経科学の発展でその複雑さが明らかにされてきたと言える。ここでは触れないが、この点を踏まえないと異投射、虚投射の区分を提起した上でなされる議論の意味を捉えそこなうということだけは指摘しておきたい[40]。異投射の具体例としてはラバーハンドの実験がよく挙げられる。目の前にラバーでできた腕があり、それと並べて見えないように自分の腕がある。目の前の人がラバーハンドに触ると同時に自分の腕にも誰かが触る。そうするとやがてラバーハンドへの接触が自分の腕への接触のように感じられてくる。錯覚によって生じる異投射である。虚投射が病的な場合の例としてはレビー小体型認知症があげられる。この患者は人物の幻影を見たりする。子どもが空想の友達をもつ場合もこれに含められる。

宗教的事象については、次のような例を想定すればいいだろう。目の前に仏像があり、これを仏像と認知して、これに対する祈願をするのは投射である。目の前に不思議な形をした樹木があり、これを神のあらわれと感じて、神に手を合わせると考えるなら異投射である。目の前に何もないのに、祖先の霊が現れたように感じ、呼びかけたとすると、虚投射である[41]。

コロナ問題では病因のウイルスは見えないので、感染した人が病因の投射元とされたりする。異投射に含めうるが、この場合、ウイルスに対しての不安、恐怖、そして怒りが、感染者や感染の可能性がある人に直接向けられる。他方、ウイルスを駆逐しようとする場合の宗教的・呪術的行為に

おいても、異投射や虚投射が起こり、ときに混在する。ここでは異投射なり虚投射なりに関わったストーリーの内容が重要である。異投射、虚投射の世界ではストーリーはより自由に設定できる。さらに付け加えるなら、宗教や呪術の場での認知においては、投射と異投射や虚投射の混在は日常的であり、違和感がないという点である。

コロナ問題への宗教的儀礼や呪術的行為では、見えないウイルスを追い払っている。これは見えない神仏に拝礼する行為と類似している。ユダヤ教やイスラム教では神は描かれないし像にも刻まれないが、神への祈りは捧げられる。さらに神仏への儀礼同様、ウイルスを駆逐しようとする儀礼や行為においても、暗黙裡に前提されていることがある。それは視覚では捉えられないが、その対象は言葉を理解し、行為を理解するという前提である。このことは通常は意識されない。

言葉を理解し、ある儀礼的行為の意味を理解するというのは、対象を人になぞらえて理解しているということを意味する。認知宗教学においては擬人観を宗教の特徴に置く考えがある。宗教が生まれてきた人間の認知的特徴として擬人観を挙げる認知宗教学者の1人がスチュアート・E・ガスリー（Stewart E. Guthrie）である。ガスリーはヒュームが示した見解を継承しながら、認知科学の発展を踏まえて、宗教史の展開を擬人観を中心に見ようとした。彼はこう述べている[42]。

「私の主張は、擬人観は主に進化によって得られた認知的戦略の副産物であるというものだが、このことは認知宗教学において幅広く受け入れられ、適用されてきている。この戦略は「パスカルの賭け」という原理にもとづいて不確かさを解決しようとするものである。どういうことかというと、もし曖昧な現象の本質に対して疑念を抱いたら、もっとも重要な可能性に賭けよ、ということである。人間にとって、もっとも重要な可能性とはその現象が人によるものということだ。それはその現象自体が人格存在であるか、または人格存在の性質や痕跡を有していることを意味する。」

擬人観は神に対してだけ生じるわけではない。悪魔や精霊や妖怪にも起こる。コロナ問題に際してなされた宗教的・呪術的行為にも、擬人観が起こる。見えないウイルスが人間と同じような知覚能力を備えているかのような前提が存在している。この無意識の前提ゆえに、祓の言葉や行為、祈祷の言葉や行為が効果を持つと信じられることになる。またそこに介在するストーリーとしては、疫病という見えない病因に対して古代から継承されてきた祓のストーリー ― 悪しきものも駆逐する適切な作法があるというストーリー ― などが採用される。ウイルス駆逐のための宗教的・呪術的行為が意識的になされているときに、無意識的には異投射ないし、虚投射のメカニズムが作動し、同時に擬人観が作動していると理解できる。

むすび

病気がもたらす不安や恐怖への宗教的・呪術的対処法は、日本文化の中に数多く継承されている。コロナ問題が深刻になる中に選び取られたのは、多くが近代以前から継承されてきたものであった。このことは遺伝的な仕組みと相反することのない文化的獲得物が継承され、社会的に広く用いられたということを意味する。20世紀後半には新宗教への入信理由は「貧病争」が中心だという議論がなされるように、近代日本では病気治しはもっぱら新宗教が担ったかのような理解もある。だが社会的な危機をもたらす病への対処法は、日本の宗教にくまなく継承されていることが言える。

他方、科学的知見を柔軟に採り入れ、宗教儀礼も3密を避けて行なわれるなどエピジェネティックな変容が発現するプロセスからは、病因に関する科学的知見が文化的継承物の主役になっていることを踏まえていることが確認される。ただし、社会一般が純粋に科学的な知見を理解し受け入れているわけではない。多分に呪術的なやり方が混在しているし、社会が受け入れているから受け

入れているというヒューリスティックな対処法も多く観察される。人間の認知という観点からすると、どのような種類の行為も、遺伝的に組み込まれた仕組みと文化的に継承されてきたものの影響を受ける。厳密なアルゴリズム的思考を用い、論理を貫徹しようとする思考法は人間の脳にとって大変な負担となる。ヒューリスティックな対処法が主に用いられるのは自然な反応である。

二重過程理論に立つスタノヴィッチは、遺伝子の作用に大きく依存する古い認知システムと文化的に発達した新しい認知システムの相互作用について論じている[43]。両者の関係、つまりどちらが優位かというような点については、異なった見解が提起されてきた。文化的に獲得された新しい認知システムが古い認知システムをコントロールするという考えをとる研究者もいる。だが、現代日本におけるコロナ問題に関する社会的対応からは、古い認知システムの強力さがみてとれる。科学的対処と信じられているものが強い影響力をもち、情報化が急速に進行するという社会環境は、文化のエピジェネティックな発現をより複雑なものにする効果をもたらしているが、古い認知システムの強固さには変わりはない。具体的に何が宗教文化のエピジェネティックな発現に関与し、どのような形で二つのシステムが関係していくかなどを検討するのは、認知宗教学に課せられたテーマと考える。さほど疑問を抱かずに行なっていることの中に、日本に継承されている宗教文化の中でもっとも利用されやすいものは何かの手がかりが見出せるのである。

註

1 本稿では宗教的・呪術的という表現をしておくが、両者は明確には区分できないという立場である。ここでは制度的、組織的な関与がある場合を宗教的対処、そうでない場合を呪術的対処とみなして議論する。

2 これに関しては奥武則『蓮門教衰亡史―近代日本民衆宗教の行く末』（現代企画室、1988年）、武田道生「蓮門教の崩壊過程の研究―明治宗教史における蓮門教の位置」（『日本仏教』59、1983年）、拙著『新宗教の解読』（筑摩書房、1996年）などを参照。

3 たとえば藤田庄市『宗教事件の内側―精神を呪縛される人々』（岩波書店、2008年）には1980年代における事例が具体的に示されている。1987年に起こった横浜市での悪魔祓い殺人事件、同年の北九州市で起こった「死体蘇生ミイラ事件」、1999年に起こったライフスペースの「ミイラ事件」などである。

4「これまで集団感染が確認された場に共通するのは、①換気の悪い密閉空間であった、②多くの人が密集していた、③近距離（互いに手を伸ばしたら届く距離）での会話や発声が行なわれたという3つの条件が同時に重なった場です」というのが3密の内容であった。

5『文化時報』2020年4月15日付「四天王寺、初の閉鎖」の記事参照。なお四天王寺の閉鎖は聖徳太子による593年の創建以来初めてという。

6『毎日新聞』2020年3月16日付「メッカ巡礼者隔離」の記事参照。

7『しんぶん赤旗』2020年3月12日付「ヒンズー教祭りも抑制」の記事参照。

8『朝日新聞』2020年4月11日付「托鉢　警戒しながらも」の記事参照。

9『朝日新聞』夕刊2020年5月14日付「タンザニア大統領、外出促す」の記事参照。

10『朝日新聞』2020年4月8日付「ユダヤ教超正統派　感染拡大」の記事参照。

11『産経新聞』2020年3月18日付「牛の尿が効く」の記事参照。

12『日本経済新聞』2020年4月19日付「インド、迷信より科学を」の記事参照。

13 https://frosty-nobel-af5bcc.netlify.app/　2020.8.24確認。「オンライン礼拝の始め方」「オンライン献金について」「自宅できける讃美歌」というサイトへのリンクがある。

14『キリスト新聞』2020年5月21日付「青山学院宗教センター　礼拝を毎日配信中」の記事参照。

15 この記事データベースには現在250万件以上の新聞、雑誌の宗教記事がクリッピングされている。

16『産経新聞』大阪版夕刊2020年1月31日付「悪疫退散祈願終息まで」の記事参照。

17 置かれた茅の輪は直径2.3mの大きさであった。『産経新聞』大阪版夕刊2020年3月10日付。

18『仏教タイムス』2020年2月27日付「コロナ退散大祈願会」の記事参照。

19『仏教タイムス』2020年3月5日付「新型コロナウイルス退散！」の記事参照。

20『京都新聞』夕刊2020年3月9日付「儀式用「覆面」で特製マスク」の記事参照。
21『仏教タイムス』2020年3月19日付「大覚寺で疫病退散法要」の記事参照。
22『京都新聞』2020年3月14日付「感染の終息祈願」の記事参照。
23『中外日報』2020年3月20日付「疫病退散、合同で祈願」の記事参照。
24『南日本新聞』2020年3月29日付「コロナ終息願い疱瘡踊り」の記事参照。
25 アマビエは江戸時代末期に肥後（今の熊本県）の海にあらわれたとされる半人半魚の妖怪で、「6年間の豊作の後、疫病が広がる。その時には自分の姿を絵にして飾っておけば病の難から逃れることができる」と言い残したとされる。
26『毎日新聞』2020年5月15日付。
27『岐阜新聞』2020年4月1日付「伝説の妖怪モチーフに護符作成」の記事参照。
28『北日本新聞』富山版2020年5月1日付「アマビエで疫病退散」の記事参照。
29『北國新聞』金沢版2020年6月1日付「アマビエ絵馬を無料配布」の記事を参照。
30 新天地イエス教会とコロナ問題に関しては、中西尋子「韓国の新宗教「新天地」はなぜ新型コロナの大感染源になったか」（『宗教問題』30、2020年5月）、李和珍「小特集　韓国におけるCOVID-19の広まりと新天地教会」（『ラーク便り―日本と世界の宗教ニュース』86、宗教情報リサーチセンター、2020年5月）などを参照。
31 この点については拙論「現代日本宗教のリバースエンジニアリング―今を観察することから始める」（國學院大學日本文化研究所編『〈日本文化〉はどこにあるか』、春秋社、2016年、所収）の議論を参照。
32 日本でも近世には浄土真宗の門主が地方に行ったときの風呂の湯を飲んだ門徒もいたとされる。
33 ミーム論はリチャード・ドーキンス（Richard Dawkins）と彼の見解を支持する人たちによって広く使われている。DITすなわちdual inheritance theoryはロバート・ボイド（Robert Boyd）とピーター・リチャーソン（Peter Richerson）による議論が代表的である。二重過程理論はキース・E・スタノヴィッチ（Keith E. Stanovich）らが代表である。
34 デイヴィッド・スローン・ウィルソン『社会はどう進化するのか』（亜紀書房、2020年）。ウィルソンはマルチレベル選択説を提唱している。
35 Religious Epigenetics　https://evolution-institute.org/religious-epigenetics/。
36 DNAのメチル化とはDNAの塩基A（アデニン）、G（グアニン）、C（シトシン）、T（チミン）のうちとくにCにメチル基CH_3が結びついてその遺伝子のはたらきをストップする現象である。
37 ヒストンとは細胞の核内にある塩基性のタンパク質でDNAはヒストンに絡まる形でつながっている。このヒストンの端末に変化が生じることで遺伝子の発現に影響が及ぶ。
38 こうした議論については、たとえばHerbert Gintis, “Gene-culture coevolution and the nature of human society,” Philos Trans R Soc Lond B Biol Sci. 2011. 参照。
39 これについては、鈴木宏昭・小野哲雄・米田英嗣「特集『プロジェクション科学』編集にあたって」（『認知科学』26-1、2019年）を参照。
40 視覚にしても、目の前の三次元の物体を三次元として投射するが、網膜では二次元的に情報が得られる。また形や色や動きなどは別々の神経細胞で処理され最終的に統合される。この仕組みはまったく意識されない。
41 これに関わる議論として戸山紀子「魔術的な心からみえる虚投射・異投射の世界」（『認知科学』26-1、2019年）を参照。戸山は内在的正義、死後の世界、魔術的伝染という3つの現象について言及している。魔術的というのは、宗教研究における呪術的に相当する。これらがプロジェクションのプロセスを含むとみなしている。そしてこれらが情報システム内にとどまる表象ではなく、世界に定位されある種の実体を持つものとして経験されていることを示唆するとしている。
42 スチュアート・E.ガスリー「神仏ははぜ人のかたちをしているのか」（國學院大學日本文化研究所編『〈日本文化〉はどこにあるか』（春秋社、2016年）参照。ガスリーの擬人観に関する議論は、Stewart E. Guthrie, *Faces in the Clouds: A New Theory of Religion*, Oxford University Press, 1993を参照。
43 キース・E・スタノヴィッチ『心は遺伝子の論理で決まるのか― 二重過程モデルでみるヒトの合理性』みすず書房、2008年。原著はKeith E. Stanovich, *The Robot’s Rebellion: Finding Meaning in the Age of Darwin*, 2004。